

# 図書館を介した高知県の和紙振興プロジェクト

鈴木 章生  
高知県立図書館

## 1 はじめに

私は、第22回ビジネス・ライブラリアン講習会のワークショップ事前課題で、「図書館を介した高知県の和紙振興プロジェクト」を企画・立案した。このテーマを取り上げた理由は、昨年12月に、実際に県内の和紙生産の現場や製紙工場に行き、材料（コウゾ）の収穫や蒸し剥ぎ等を体験する機会をとおして、地域の伝統産業が直面している厳しい状況を知り、図書館がその解決の一助になりたいと考えたためである。

その厳しい状況とは、少子・高齢化の進展により、①急斜面の畑でコウゾを生産する担い手が急速にいなくなり、高知県産のコウゾの確保が危機に直面していること、②県の伝統産業であるにもかかわらず（あるいは伝統産業であるがために）、生産と消費の関係が硬直的であり、高付加価値の製品のバリエーションが乏しいこと、が挙げられる。

当初は、図書館としてこの課題の解決を支援することは難しいと考えたが、アドバイザーから助言いただき、実現の可能性を見出せた。講習会受講で学んだことをも生かし、この企画をブラッシュアップすることで修了レポートとする。

## 2 背景・現状と課題

### (1) 背景・現状

高知県の和紙産業の背景・現状については、平成30年10月に策定された『土佐和紙総合戦略』（注1）に詳しい。この戦略の「背景・目的」には、私が生産現場や製紙工場で体験的に知ったことと一部重なるが、「楮生産農家の高齢化等による原材料不足、和紙生産者の後継者育成、流通販売、文化伝承」（p.1）が挙げられている。

### (2) 課題

これらの背景・現状に対応し、『土佐和紙総合戦略』では、4つの基本方針のもと、以下のとおり直面する課題が挙げられている（P.19より一部抜粋）。

方針	① 土佐和紙の原料確保	② 用具の確保と土佐和紙生産者の後継者育成	③ 土佐和紙のPR・販売促進・新商品開発	④ 土佐和紙文化の発信と無形文化遺産登録が挙げられている
課題	・原料生産体制の確保等	・用具製作職人の確保 ・手すき和紙職人の確保等	・土佐和紙のブランド力強化 ・土佐和紙を使用する機会の創出 ・販路の開拓 ・新たな商品開発	・学校現場における歴史教育 ・文化・芸術に触れる機会の創出

以下では、図書館の有する人的・物的資源を生かして、上記の課題にアプローチする立場から、企画・立案する。

### 3 事業の概要及び目的・効果

#### (1) 概要

本企画は、以下の4つ取組を柱とする。

- ① 和紙の生産工程（原材料の収穫・処理、加工等）への参画を条件として、和紙製品のアイデアを競うコンテストを実施する。
- ② アイデアづくりには、和紙関連の専門機関・団体と連携しながら、図書館が情報面でバックアップする。
- ③ 集客施設としての図書館の場を生かして試作品を公開することで、製品発表の機会の確保と和紙の普及を図る。
- ④ 優れた試作品については、連携する専門機関・団体を支援を得て製品化することで、和紙の販路拡大の一助とする。

#### (2) 目的・効果

以上の4つの取組により、以下の3つの目的達成を図る。

- ① 製品開発を担う人材と素材としての和紙との「出会い」のきっかけを創出することで、高付加価値の和紙製品の開発を促進する。
- ② 製品開発を担う人材が、生産工程（原材料の収穫・処理、加工等）へ参画することで、伝統産業である土佐和紙について、深い理解を得るとともに、不足するマンパワーを補う。
- ③ 図書館での製品発表を通じて、多くの利用者が製品を目にすることで、広く土佐和紙への関心を喚起する。

また、事業の効果としては、想定する主たる事業対象者が、以下のように変化することを目指す。

- ◎ 製品開発を担う人材（特に、県内の企業や大学や工業高等専門学校の学生）が、素材としての土佐和紙の魅力や有用性に着目することで、土佐和紙を生かした製品開発や情報発信に取り組むようになる。

### 4 事業の具体策

上記3-(1)に示した概要に沿って、その具体策を述べる。

#### (1) 和紙製品のアイデアを競うコンテストの実施

県内の企業や大学・工業高等専門学校を主な参加対象として、和紙製品のアイデアを競うコンテストを行う。実施に先立って、『土佐和紙総合戦略』の事務局である高知県工業振興課ほか、高

知県紙産業技術センター、いの町紙の博物館、一般社団法人高知県製紙工業会、高知大学地域協働学部といった専門機関・団体との連携関係の構築が欠かせない。特に、本事業の「肝」となるは、コンテスト参加の条件として、「生産工程（原材料の収穫・処理、加工等）へ参画」（注2）することであり、この実現のためには、協力してくれるコウゾ農家を含めて、綿密な打ち合わせを要する。

そのうえで、まずは、図書館において製品アイデアを練るための講座を開催する。その内容には、専門機関・団体の職員を講師とした講義（和紙産業の現状と課題、和紙製品の技術開発や市場動向等）（注3）のほか、図書館の資料・情報を活用したワークショップを取り入れる。その際、図書館司書が同席し、会場でレファレンスに応じることとする。

講座参加者は、指定の期間までに製品アイデアを作成し、コンテストに応募する。集まったアイデアについては、「生産工程に参画すること」や「和紙製品としての実現可能性」といった視点で一次選考を行う。この一次選考通過者が、一定の期間（5か月を想定）、原材料の収穫・処理、加工等のプロセスを体験しながら、試作品を作成する。

## (2) 図書館による情報面のバックアップ

上記4-(1)の「製品アイデアを練るための講座」に加えて、試作品の制作プロセスにおいても、図書館は専門機関・団体と連携しながら、コンテスト応募者を資料・情報面からサポートすることとする。一次選考段階のアイデアは、その概要やコンセプトを大きく変えない限り、生産工程への参画を通じて得た知識・技術等に基づき、変更を加えることを認める。そのように、生産現場と一体となって製品開発を行う際に、図書館が情報面での支援者としての役割を果たすことを目指す。

## (3) 図書館を場とした試作品の公開

試作品が出来上がった後は、一定期間、図書館で展示する。もちろん、単に試作品を陳列するだけでなく、土佐和紙をめぐる現状や課題についての啓発機会とするため、関連書籍やパネル等の展示も行う。併せて、5か月にわたって、生産工程に参画しながら製品開発を行ってきたプロセスを動画等に収録して、モニターで放映することとする。

また、「公平性」が担保されるならば、専門機関・団体職員の審査（二次選考）とは別に、利用者による審査も行ってよいと考える。シールを使って来館者による参加型の投票を行い、専門家等による審査において、一定程度加点するというのも一つの案として検討したい。

さらに、試作品制作の過程で、図書館の資料・情報がどのように役に立ったのかについて、コンテスト応募者からコメントをもらい、役立った資料とともに周知することも行いたい。図書館活用の成果を「見える化」する機会にすることが重要と考える。

このように、試作品単独の展示とすることなく、図書館の持つ資源を存分に生かし、広く関心を喚起するとともに、図書館側にとっても意味のある成果となるよう工夫したい。

## (4) 優れた試作品の製品化

上記4-(3)の公開の後、二次選考を行い、優秀作品を決定する。連携先の専門機関・団体の協

力を得て（注4）、この製品化が実現すれば、土佐和紙の販路拡大や税収増が期待できる。また、図書館にとっても、図書館活用を通じたビジネスチャンスの拡大といった視点で、有力な広報素材を得ることとなる。この段階においても、図書館活用の成果の「見える化」ということに、貪欲にこだわりたいと考える。

## 5 事業のスケジュール等

事業を実施に向けたスケジュールについては、専門機関・団体との連携関係の構築もさることながら、自然の生産物を相手にすることもあり、慎重を期す必要がある。1年目は、連携のための協議のほか、事業全体の構成について、十分な検討や検証を行いたい。

2年目は、4月から準備に着手し、「製品アイデアを練るための講座」を7月に実施。8月から9月のアイデア募集期間を経て、10月に一次選考を実施。11月から翌年3月にかけて原材料の収穫から試作品の完成まで行う。4月から5月にかけて図書館での展示を経て審査（二次選考）を行い、結果を発表する。1サイクルが14か月程度を要する事業であるため、毎年度開催することは困難であるが、初回の取組についての検証において効果が認められれば、隔年で実施することを検討したい。

## 6 おわりに

以上のワークショップ企画のブラッシュアップにあたっては、今回の講習会で得たさまざまな視点を取り入れたつもりであるが、自身の確認の意味を込めて、特に重要と思うものを3点のみ以下に挙げておく。

- ① 期待される成果を提示する際、ストーリー性を重視し、対象者の変化として示すこと。  
⇒ 人を中心に置くことで、共感的に説明することが可能となる。
- ② 事業のプロセスを SNS 等で発信することで、利用者の評価につなげること。  
⇒ 本企画は製品開発という性質上、知的財産に配慮して、図書館での試作品の展示と併せて動画放映する。
- ③ 普段、可視化されにくい図書館活用の成果を、具体的な事例を通じて「見える化」する。  
⇒ 当館でも図書館活用事例のまんが化を行っているが、年に1事例程度しか扱うことができない。あらゆる機会を使って、図書館活用の成果を「刈り取り」、具体的に示すことが重要である。

長く図書館サービスの現場から遠ざかっており、今回の講習会に参加することに不安もあったが、すぐにでも生かせる実践的な内容ばかりであり、過去に学んだことを思い出したり、また、新たな知識・技術等を発見したりと、私にとって大変実りある研修機会となった。

私の所属である高知県立図書館は、「課題解決先進県」を標榜する県に所在し、「課題解決の支援ができる図書館」を基本方針の一つに掲げ、高知市民図書館と共同でオーテピア高知図書館を運営している。地域に貢献できる図書館としてさらに進化できるよう、今回の講習会での学びを存分に生かしたい。

## 注

- 1 高知県『土佐和紙総合戦略』平成30年(2018)10月  
[https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/150501/files/2018102300216/file\\_20181151175220\\_1.pdf](https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/150501/files/2018102300216/file_20181151175220_1.pdf)
- 2 高知大学地域協働学部の田中は、以下の文献において「和紙は、手紙や絵画などでいろいろな思いを人に伝えるための素材であるのみでなく、その原料の栽培や加工、紙漉きを通して、多くの人々をつなげていく可能性を持っている」と指摘する。実際に「体験」や「参画」することを重視した企画としたい。  
田中求「和紙がつなげる人と森」『森林環境』22-31, 2017年
- 3 例えば、高知県紙産業技術センター (<https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/151406/>) は、地場産業である製紙業の振興を目的とした試験研究機関である。また、いの町紙の博物館 (<https://kamihaku.com/>) では、普段から、和紙に関する体験的な学習機会を提供している。また、これら機関の専門性を生かした講座の実施は、本企画に欠くことができない。
- 4 新商品開発への支援については、『土佐和紙総合戦略』において、高知県工業振興課及び高知県紙産業技術センターが施策の主体として掲載されている。また、「ものづくり事業戦略推進事業費補助金で市場調査や新商品開発を支援する」との記載があり、資金面での支援も期待できる。